

年 会 に 思 う



田 中 俊 逸

大学に職を得て今年で36年目となる。この間所属は一度変わったが同じ大学で分析化学に関連した研究を行ってきた。少なくとも本人はそう思っている。支部の幹事には1985年になった、いやならしていただいた。従って31年を支部の幹事として過ごしたことになる。31を7で割ると4あまり3。7で割るのは年会在7年周期で各支部に回ってくるからだ。支部の幹事として過去4回、北海道での年会を経験したことになる。58年会(2009年)、51年会(2002年)、44年会(1995年)、37年会(1988年)である。これらの年会への私の関与の仕方は、その時々年齢やポジション、実行委員長との距離などによって濃淡はあったものの、なんらかの役目を果たしてきたつもりである。次の第65年会(2016年)は現役最後の年会としてゆったりと参加したいと思っていた矢先の実行委員長の拜命であった。過去に北海道支部の行った年会は、それぞれの実行委員長のもと特徴ある運営がなされた。北海道のように会員数の少ない支部では、会員の多くが支部の幹事であり、幹事のすべてが年会の実行委員になることから、年会の準備は支部を挙げての一大イベントとなる。年会のために、実行委員会の開催はもとより、各係の担当者間での打ち合わせ、年会総務と各係との調整会議など、年会というキーワードのもとに委員間で様々なコミュニケーションが交わされる。このような交流を通して支部に一体感が生まれ、年会在盛り上がっていく。支部にとっての年会在7年に一度のお祭りなのだ。このパワーと情熱が次の6年の支部活動を支えてきた。他の支部でも同じようなことが言えるであろう。

私が参加してきた約35年間の年会在において、発表の仕方は、青焼きスライドからOHP、PCによる発表と大きく変化してきた。年々厚くなっていた要旨集はなくなり身軽になったと思ったが、それより重いPCを持ち歩かなければならなくなった。講演申込みや参加登録は郵送、FAXからWeb登録に代わった。一方、年会スケジュールの大枠はほとんど変化していない。そろそろ年会在のスケジュールについても考えるときに来ているのかもしれない。現在、本部企画戦略会議室では年会在のあり方について精力的に協議していると聞く。また、北海道の次の年会在(2017年)は東北支部ではなく本部が主催することになっている。そこでは大きな変革がなされることになるだろう。

第65年会はどのような年会在になるであろうか。確固たる信念はないが、上記のことを考えると、これまでの年会在の良さを生かしつつ、新しい年会在への橋渡しになればいいと思う。さて、これまで7年周期だった年会在が、本部が加わることで8年周期になる。そうなるとうある支部の年会在が常にオリンピック年と重なることになる。2016年はリオデジャネイロでのオリンピック年。8年周期だと北海道での年会在の開催は常にオリンピック年と重なる。開催日程を決めるときはオリンピックの開催日程を気にしなければいけない。幸い、第65年会の日程(9月14-16日)はオリンピックの日程(8月5-21日)とは重なっていないのでご安心を。

[Shunitz TANAKA, 北海道大学大学院地球環境科学研究院, 日本分析化学会庶務担当理事]